

調査研究

長野県高校山岳部顧問の意識に関する調査

長野県山岳総合センター

I. はじめに

日本百名山ブームからの中高年登山の高まりに引き続いて、比較的若い世代が登山を行うようになってきている。その流れは高校生にも及んできており、長野県内の一部の高校では山岳部員が増加傾向にある。ただ、高校山岳部の数は近年減少傾向にあり、新しい顧問が育ちにくい状況になってきている。春の県大会や秋の新人大会の折には、顧問体制が今後も維持できるかどうかの危惧の声も聞かれる。そこで県内の山岳部を持つ高校の割合や、学校毎の顧問体制、部活動を指導する顧問の意識などを調べることにより、当センターが高校登山活動の一助となる方向性を探ることとした。

II. 調査内容

1. 調査方法

公立私立を問わず、長野県内の全高校 104 校にアンケートをお願いした。その折に山岳部だけではなく、実際に登山を行っているアウトドアクラブやフィールド活動を行っている生物部などの理科関係部にもお願いをした。なお、アンケートは学校毎に複数枚配布し、顧問お一人ずつに答えていただくこととした。

2. 実施時期

2016年6月～7月

3. アンケート内容

以下のアンケート用紙を配布し、調査を行った。

高校登山活動関係部（班・同好会）顧問アンケート調査

長野県山岳総合センター

学校名 _____ 高校

下記の問いにお答えください。該当するものに○を、又は記入をお願いします。

1. 貴校には登山活動を行っている部（班・同好会）がありますか。

ア. ある

イ. 無い

以下、ア. ある とお答えされた学校の顧問の先生にお尋ねいたします。

2. 部（班・同好会）の名称は何ですか。 _____

3. その部（班・同好会）の顧問は何名ですか。 _____ 名

4. 貴校の部（班・同好会）ではあなたはどのような立場ですか。
 ア. 主顧問 イ. 副顧問（第2・3・4顧問）
5. 年齢をお書きください。 _____歳 性別をお書きください。（男・女）
6. ご自身の登山経験年数をお書きください。 _____年
7. 高校での登山活動の指導経験年数は何年ですか。 _____年
8. 部活動にどのようにかかわっていますか。
 ア. 生徒の部活動に中心にかかわっている。技術的にも生徒を指導している。
 イ. 生徒の指導をしたいが、登山の知識・技術が不足していてあまりできない。
 ウ. 生徒の登山活動の移動のため、車での引率だけをしている。
9. 現在、部活動にかかわる上であなたが身に付けたいと思っていることは何ですか。（複数回答可）
 ア. 山岳部の運営方法
 イ. 登山を行う上での基本的な知識
 ウ. 登山を行う上での基本的な技術
 エ. 登山を行う上での危機管理能力（救急対応、ビバーク等）
 オ. 生徒に指導するトレーニング方法
 カ. 岩や雪のある山に登るための、より高度な登山技術
 キ. その他【 _____ 】
10. 上記の問い9でイを選んだ方にお聞きします。身に付けたい**基本的知識**は何ですか。（複数回答可）
 ア. 山の名前 イ. 高山植物の名前 ウ. 山の動物の名前 エ. 地図の読み方
 オ. 山岳装備の特性 カ. 山の気象 キ. 登山計画の作成 ク. 登山ルート
 ケ. 登山の医学的・生理学的知識 コ. その他【 _____ 】
11. 上記の問い9でウを選んだ方にお聞きします。身に付けたい**基本的技術**は何ですか。（複数回答可）
 ア. 登山での歩行技術（無雪期） イ. 山での生活技術（テント生活等）
 ウ. 残雪期の雪上技術（歩行、ピッケル・アイゼンの使い方） エ. 天気図作成技術
 オ. 地図とコンパスを登山で使える技術 カ. 固定ロープの張り方と通過方法
 キ. 登山での応急処置 ク. ツェルトの張り方 ケ. 雪洞の作り方 コ. クライミング技術
 サ. その他【 _____ 】
12. 貴校の部（班・同好会）では、スポーツクライミングを行っていますか。
 ア. 行っている イ. 行っていない
13. 上記問い12でア行っている、を選んだ方にお聞きします。活動場所はどこですか。（複数回答可）
 ア. 自校の壁 イ. 他校の壁 ウ. 山岳総合センターのボルダリング壁 エ. 大町市運動公園人工壁 オ. 民間のジム【名称： _____ 】
 カ. その他【 _____ 】
14. 自校にクライミング壁をお持ちですか。
 ア. ある イ. 無い

15. 本校にクライミング壁をお持ちの場合、どのような利用状況ですか。
- ア. 週1回以上使っている イ. 月1回程度使っている ウ. 年数回使っている
エ. 全く使っていない
16. 部（班・同好会）活動指導でのあなたの悩みは何ですか。（複数回答可）
- ア. 自分の登山体力の不足
イ. 自分自身の装備費の経済的負担が大きいこと（山の装備費が高いため）。
ウ. 生徒を指導する上での登山の知識・技術が不足していること。
エ. 生徒を指導する上でのスポーツクライミングの知識・技術が不足していること。
オ. 登山引率で生徒の命を預かることが精神的に負担。
カ. 登山経験があまり無い中で顧問となっていること。
キ. 他の部（班・同好会）活動と兼務していること。
ク. 部員の数少なく、活動が停滞していること。
ケ. 部員が多く、指導が行き届かないこと。（顧問の人数が足りない）
コ. 部の予算が少なく、テントなどの共同装備が揃えられないこと。
サ. 経済的に厳しい生徒が、登山靴や雨具などの基本的な個人装備を揃えられないこと。
シ. その他 []

17. 登山の知識・技術の顧問向けの研修機会があれば、参加しようと考えますか。

ア. 受りたい内容で、日程が合えば積極的に参加したい。
イ. 校務が忙しいので、積極的に参加しようとは思わない。
ウ. 自分にどのような研修が必要なのかよくわからない。
エ. 研修には興味・関心がない。

18. 顧問向け研修会はどの時期が参加しやすく、生徒に指導する際に有効ですか。（複数回答可）

ア. 4～6月 イ. 7～9月 ウ. 10～12月 エ. 1～3月 オ. その他 []

19. 生徒向け研修会はどの時期が生徒の参加がしやすいですか。（複数回答可）

ア. 4～6月 イ. 7～9月 ウ. 10～12月 エ. 1～3月 オ. その他 []

以下、山岳総合センターについてお聞きします。

20. 長野県山岳総合センターという施設の存在を知っていますか。

ア. 知っている イ. 名前は聞いたことがある ウ. 知らない。初めて聞いた。

21. 上記問い20でアとイを選んだ方にお聞きします。センターの活動内容を知っていますか。

ア. 安全登山講座を企画・運営していることを知っている イ. よく知らない

22. 上記問い21でアを選んだ方にお聞きします。センターの講座に参加されたことがありますか。

ア. ある イ. 無い

23. 山岳総合センターへの要望があればご記入ください。具体的な研修（講座）内容でも結構です。

--

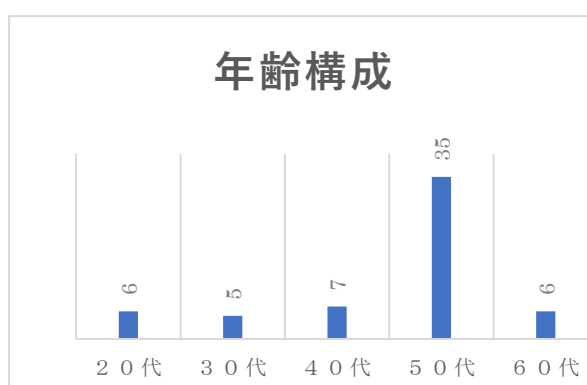
Ⅲ. アンケート結果

今年度の長野県全体の公私立高校数は、普通科・定時制及び地域キャンパス高校と通信制高校を含めて104校である。その内、山岳部（あるいは登山を活動に含めているアウトドア部やフィールド活動を行う部活動）のある学校は24校である。これは23.1%に当たる。通信高校を除いた普通科・定時制高校では24.5%である。今回のアンケート調査では、全高校に複数枚のアンケート用紙を配布し、返送をお願いした。山岳部のない学校が多いためか、回答いただけない学校も多く、その場合は直接電話をして山岳部の有無を確認した。回答をいただいた場合も、顧問全員でない学校もあった。そのため、今回のアンケート集計は、長野県のすべての顧問を網羅したものではないことをおことわりしておく。

1. 顧問の概要

(1) 年齢

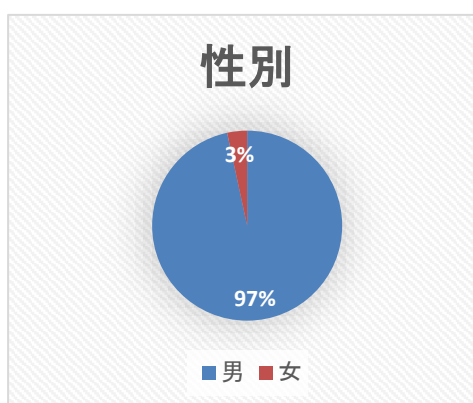
区分	人数	比率
20代	6	10.2%
30代	5	8.5%
40代	7	11.8%
50代	35	59.3%
60代	6	10.2%
合計	59	100%



- ・顧問年齢は50～60代が70%近くを占め、反対に20～30代が20%に達していない。登山活動では顧問が引率を行うことがほとんどであるので、生徒との体力差に支障が生じる可能性がある

(2) 性別

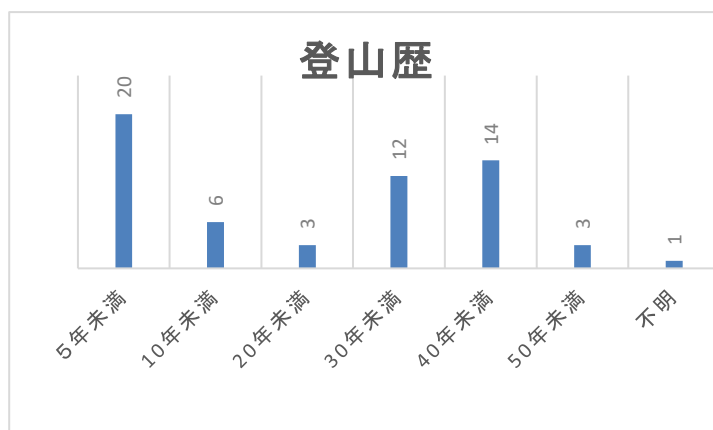
区分	人数
男	57
女	2
合計	59



- ・男性顧問が圧倒的に多い。女子部員が増加している中で、宿泊を伴う登山活動を行うでは女性顧問の存在は重要である。

(3) 登山歴

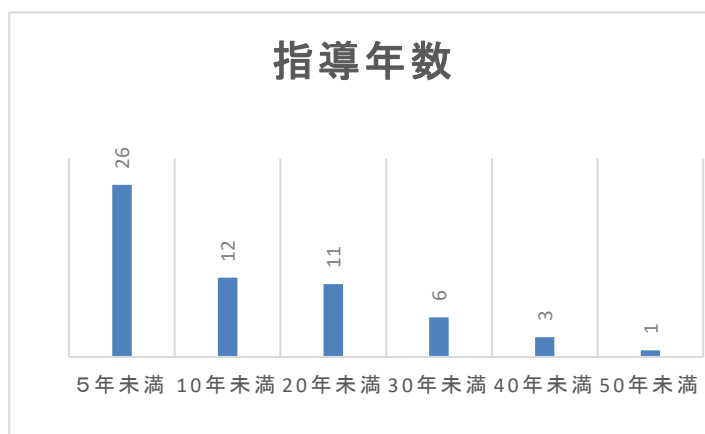
区分	人数	比率
5年未満	20	33.9%
10年未満	6	10.2%
20年未満	3	5.1%
30年未満	12	20.3%
40年未満	14	23.7%
50年未満	3	5.1%
不明	1	1.7%
合計	59	100%



・登山経験5年未満の顧問と30年～40年未満の顧問の2つの山がある。

(4) 指導歴

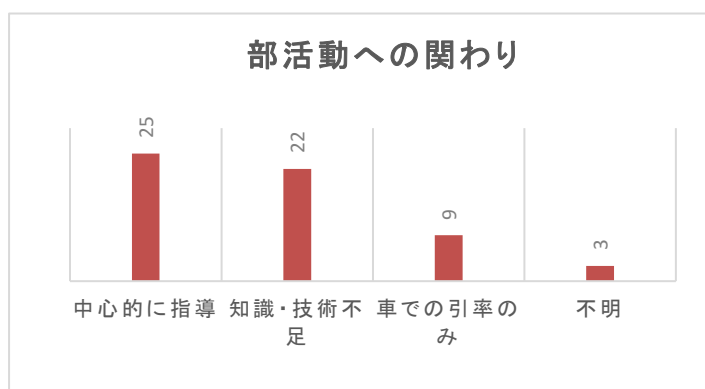
区分	人数	比率
5年未満	26	44.1%
10年未満	12	20.3%
20年未満	11	18.6%
30年未満	6	10.2%
40年未満	3	5.1%
50年未満	1	1.7%
合計	59	100%



・指導年数10年未満の顧問が60%以上を占め、5年未満の顧問も40%を超えている。

(5) 部活動への関わり

区分	人数	比率
中心的に指導	25	42.4%
知識・技術不足	22	37.3%
車での引率のみ	9	15.2%
不明	3	5.1%
合計	59	100%



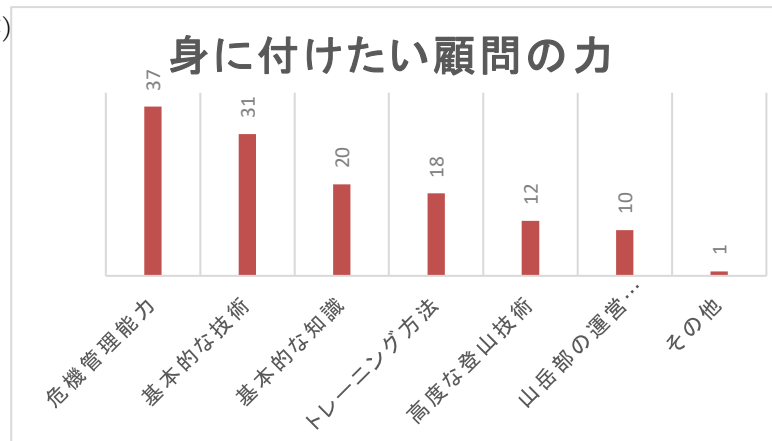
・中心的に指導している顧問が各校に1人はいる。

・一方で、知識・技術不足で指導できにくい顧問や引率のみの顧問が合わせて半数を超えている。

2. 顧問の部活動への意識

(1) 身に付けたい顧問の力(複数回答)

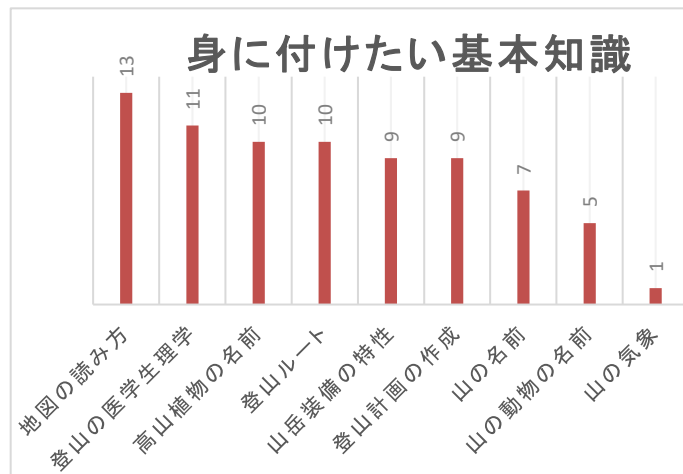
区分	人数	比率
危機管理能力	37	62.7%
基本的な技術	31	52.5%
基本的な知識	20	33.9%
トレーニング方法	18	30.5%
高度な登山技術	12	20.3%
山岳部運営方法	10	16.9%
その他	1	1.7%



- ・顧問が付けておきたい力としては、「危機管理能力」が60%以上となっている。続いて、登山の基本的技術・知識となっている。
- ・高度な登山技術への指向は、20%とあまり高くはない。

(2) 身に付けたい基本的知識(複数回答)

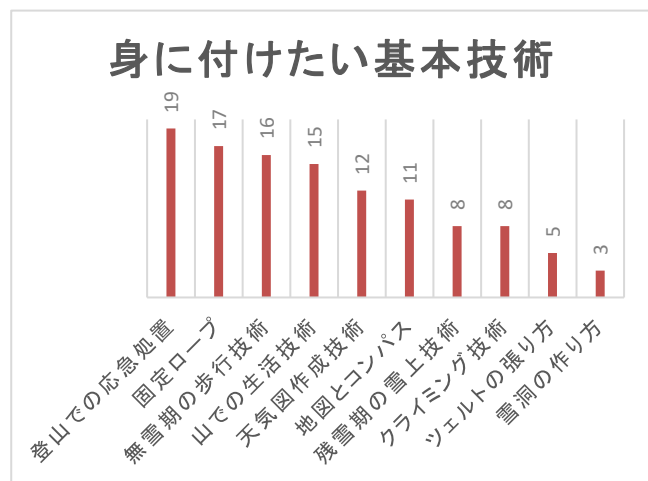
区分	人数	比率
地図の読み方	13	22.0%
登山の医学生理学	11	18.6%
高山植物の名前	10	16.9%
登山ルート	10	16.9%
山岳装備の特性	9	15.2%
登山計画の作成	9	15.2%
山の名前	7	11.9%
山の動物の名前	5	8.5%
山の気象	1	1.7%



- ・身に付けたい基本的知識の最上位は「地図の読み方」である。これは読図の必要性を認識しているが、それを学ぶ場があまりないことを示している可能性がある。

(3) 身に付けたい基本技術(複数回答)

区分	人数	比率
登山での応急処置	19	32.2%
固定ロープ	17	28.8%
無雪期の歩行技術	16	27.1%
山での生活技術	15	25.4%
天気図作成技術	12	20.3%
地図とコンパス	11	18.6%
残雪期の雪上技術	8	13.6%
クライミング技術	8	13.6%
ツェルトの張り方	5	8.5%

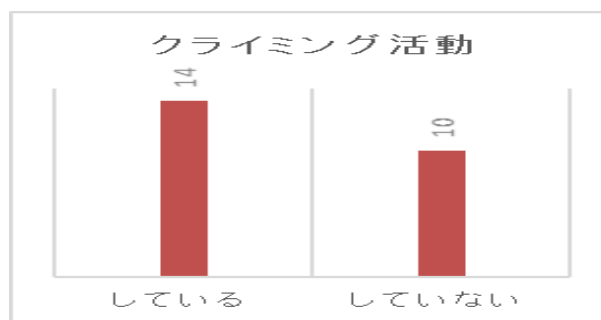


- ・身に付けたい基本的技術の上位は「登山での応急処置」「固定ロープ」である。これは顧問が付けておきたい力とした『危機管理能力』とも関係していると思われる。登山での歩行技術や生活技術が上位にあるのは、登山の総合的な力を付けておきたいという願いからと考えられる

3. クライミング活動の実情

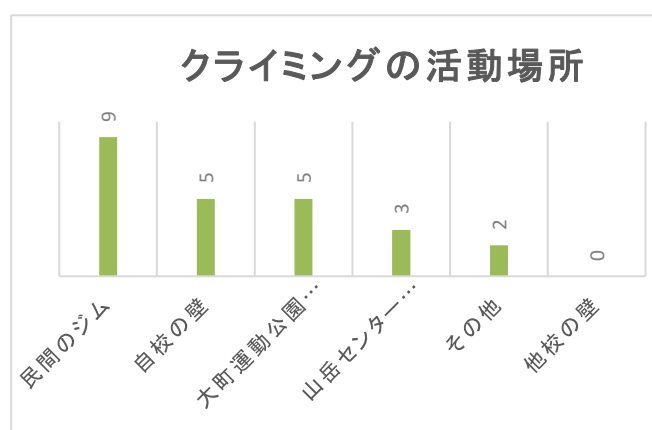
(1) スポーツクライミングの実施

区分	高校数	比率
している	14	58.3%
していない	10	41.7%
合計	24	100%



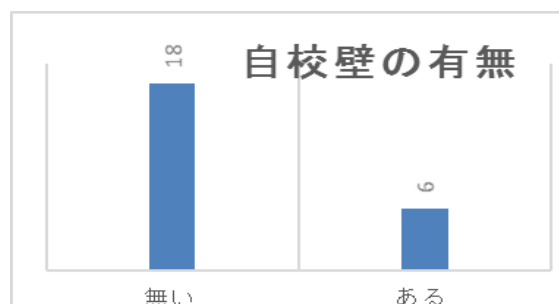
(2) クライミングの活動場所

区分	高校数	比率
民間のジム	9	64.3%
自校の壁	5	35.7%
大町人工岩場	5	35.7%
山岳センター	3	21.4%
他校の壁	0	0.0%



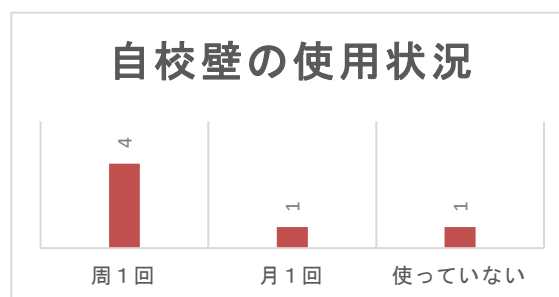
(3) 自校にクライミング壁の有無

区分	高校数	比率
無い	18	75.0%
ある	6	25.0%
合計	24	100%



(4) 自校壁の使用状況

区分	高校数	比率
周1回	4	66.6%
月1回	1	16.7%
使っていない	1	16.7%
合計	6	100%

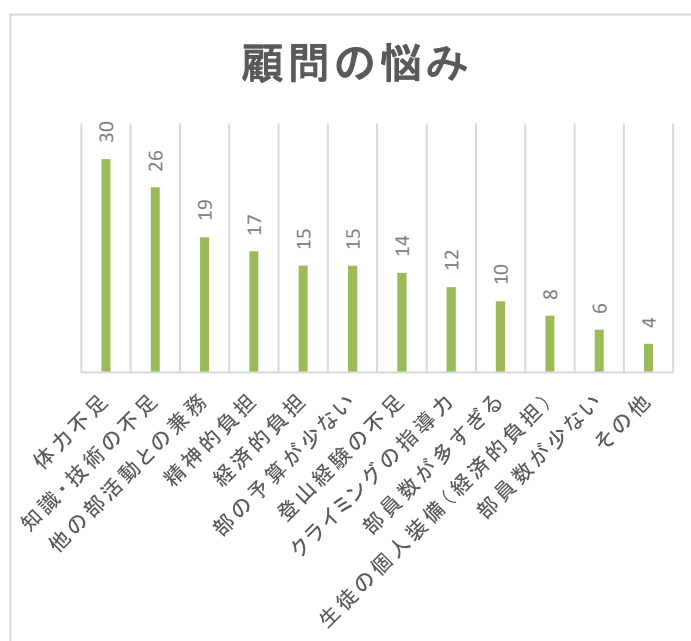


- ・クライミングについては、取り組んでいる学校は60%近くあるものの、自校に壁のある学校は6校のみである。クライミング活動は校外の施設に頼ることが多く、民間のジムに利用することは経費の面からも活動に制約が出る可能性がある。

民間ジム：エッジ&ソファ、長野アートウォール、ノボリバ、佐久平ロッククライミングセンター

4. 顧問の悩み

区分	人数	比率
体力不足	30	50.8%
知識・技術の不足	26	44.1%
他部との顧問兼務	19	32.2%
精神的負担	17	28.8%
経済的負担	15	25.4%
部の予算が少ない	15	25.4%
登山経験の不足	14	23.7%
クライミング指導力	12	20.3%
部員数が多すぎる	10	16.9%
生徒の個人装備(経済負担)	8	13.6%
部員数が少ない	6	10.2%
その他	4	6.8%



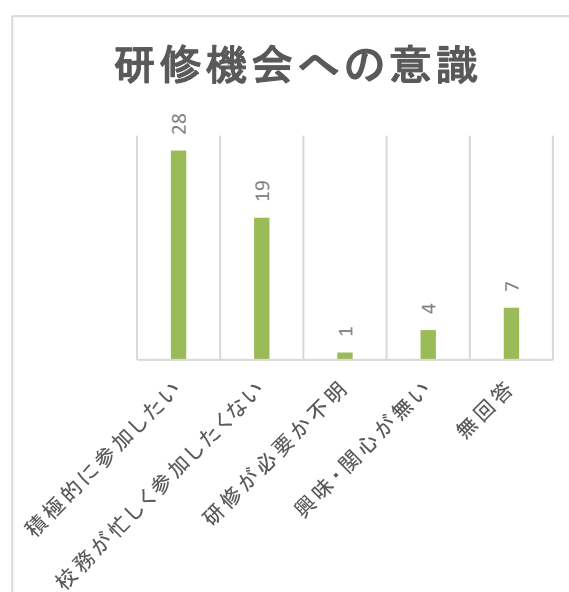
- ・顧問の悩みでは、「体力」が50%を超えているのは、顧問年齢が高いことが関係している可能性がある。また、40%以上の顧問が「登山の知識・技術不足」を感じている。「他の部活動との顧問兼務」、生徒の命を預かる「精神的負担」、装備などを揃える「経済的負担」も上位となっている。

5. 研修への意識

(1) 研修機会への意識

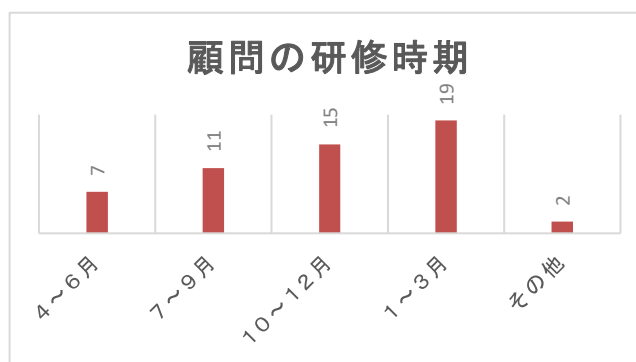
区分	人数	比率
積極的に参加したい	28	47.4%
校務が忙しく参加したくない	19	32.2%
研修が必要か不明	1	1.7%
興味・関心が無い	4	6.8%
無回答	7	11.9%
合計	59	100%

- ・研修機会があれば参加したい顧問が50%近くになっている。
- ・校務多忙での不参加顧問が30%以上である。



(2) 顧問の研修時期（複数回答）

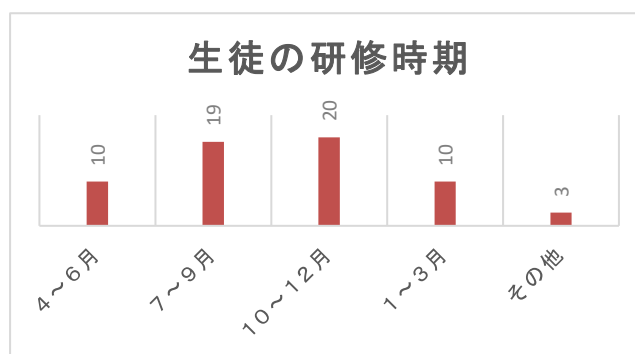
区分	人数	比率
4～6月	7	11.9%
7～9月	11	18.46%
10～12月	15	25.4%
1～3月	19	32.2%
その他	2	3.4%



- ・顧問の研修時期は年度の後半になるほど都合がよいとなっている。

(3) 生徒の研修時期（複数回答）

区分	人数	比率
4～6月	10	16.9%
7～9月	19	32.2%
10～12月	20	33.9%
1～3月	10	16.9%
その他	3	5.1%

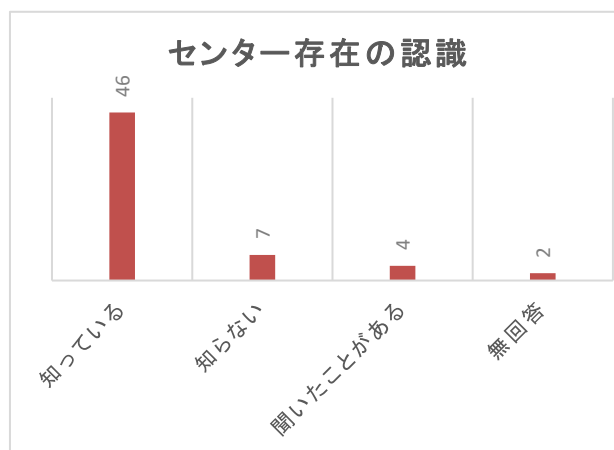


- ・生徒の研修時期は夏～秋にかけてが都合がよいとなっている。

6. 山岳総合センターとの関わり

(1) センターの存在を知っていますか。

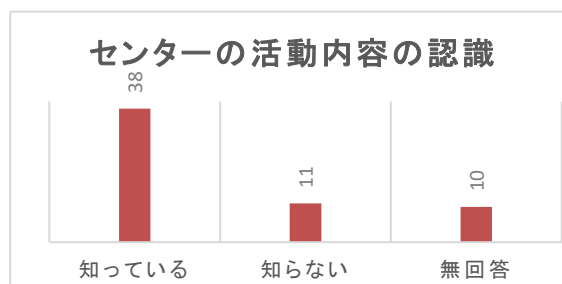
区分	人数	比率
知っている	46	77.9%
知らない	7	11.9%
聞いたことある	4	6.8%
無回答	2	3.4%
合計	59	100%



- ・8割近くの顧問が山岳センターの存在を知っており、認知度は高いと言える。

(2) センターの活動内容を知っていますか。

区分	人数	比率
知っている	38	64.4%
知らない	11	18.6%
無回答	10	16.9%
合計	59	100%

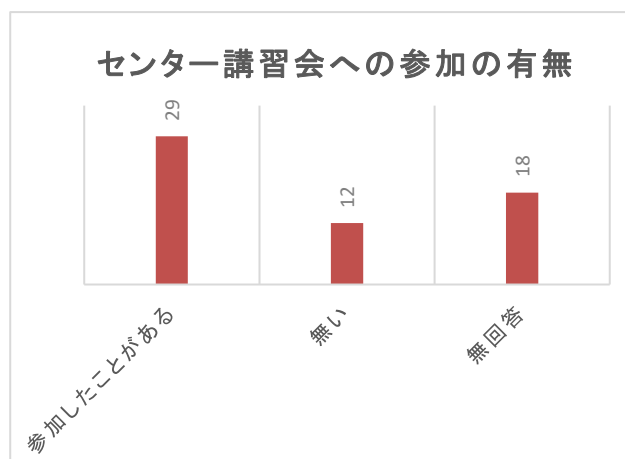


- ・センターの活動への認知度は60%余りであり、センター存在の認知度とはやや差がみられる。

(2) センター講習会への参加の有無

区分	人数	比率
参加したことがある	29	49.2%
無い	12	20.3%
無回答	18	30.5%
合計	59	100%

- ・約50%の顧問がセンターの講習会に参加したことがある。



IV. アンケート結果から考えられること

高校での登山はスポーツとして部活動に位置づけられているが、登山自体は知識・技術・経験が重要なため、顧問の力量が部活動の内容に直結する。また、部活動では生徒と一緒に登山をすることになるので、技術や経験でカバーするとしても、基本的な登山体力は重要である。アンケートからみると顧問の年齢が高い方に大きく偏っている。50代以上の顧問が多いことからみると、登山経験の有無が関係していると思われるが、高校の登山活動を衰退させないためには、若い年代の顧問育成が急務の課題である。この課題への危機意識は、学校現場だけではなく、登山界全体が持つ必要がある。

アンケートで顧問が身に付けたい力として、危機管理能力が最上位にあることは重要である。危機管理の第一歩は登山計画の立案からであるが、近年の登山者の遭難は、登りたい山（ルート）と自分の力量とのズレに一因があるといわれている。高校の登山活動では顧問が、生徒の目標の山と登山で要求される力量を一致させる必要がある。読図への関心の高さも、道迷い遭難の多い現状からは重要である。登山の医学・生理学や登山ルートの知識、応急処置や固定ロープなどの技術はいずれも危機管理に属するものである。アンケートでは、これらへの関心も高くなっている。生徒の命を預かる精神的負担を悩みに挙げている顧問も4分の1を超えているが、それ故に危機管理への関心が高いのであろう。

当センターは、顧問が付けたいと考える登山の知識や技術を提供する場の設定へどのように関わられるだろうか。方向性としては以下の事が考えられる。

- ① 高体連登山部への研修場所の提供、知識・技術の面でのサポート、出前講習等。
- ② 当センターが実施している高校向け講習の内容の充実。
- ③ 顧問が参加しやすい講習会のあり方を探る。（日程、内容等）

※ 高体連登山部（正式名：長野県高等学校体育連盟登山専門部）について

高体連登山部は高校の山岳部活動を統括しており、インターハイにつながる県大会の運営を行っている。長野県では、東北中南信の4地区に分かれており、地区大会や交流登山を開催している。中信地区には、安全登山研究会が置かれており、登山計画書の審議や年1回の生徒を交えた安全登山研修会を行っている。高体連が運営するインターハイは安全登山技術（体力を含む）を競う競技である。この他に、クライミング分野では、全国選抜大会への選手選考会を行っている。国体の山岳競技（リードクライミング・ボルダリング）には、長野県では高体連登山部は特には関わっていない。

V. おわりに

高校で豊かな登山活動を経験した生徒は、登山を生涯スポーツとして続けていく可能性がある。自分が楽しむだけでなく、家族や友人とも山行を共にするかもしれない。彼らは、高校での部活動が安全で、基本に則ったものであれば、未来の一般登山者としてその方向性を継続してゆくであろう。安全登山の啓発は、当センターが行う安全登山講習だけではなく、基本を身に付けた登山者が一翼を担うことが大切であると考ええる。

今回の調査では、高校山岳部の活動実態の一部も明らかにしたいと考え、クライミング活動の項目を設けた。この結果を全県の様子を把握する資料としていただければ幸いである。クライミング以外の項目についても、他校の顧問がどのような意識でいるのかを把握し、今後の活動への参考にしていただけたらと考える。

調査の実施にあたり、お忙しい中でアンケートに答えていただいた顧問の先生方、学校関係者に深く感謝申し上げる。